

とちぎ協働デザインリーグは、  
協働のまちづくりの調査研究、  
支援・協力、政策提言等を行う  
シンクタンクです

2013.11

リーグファイル 12

〒320-0032 宇都宮市昭和 2-2-7  
とちぎボランティアNPOセンター内  
URL:<http://www.tochigi-tcdl.net>

とちぎ協働デザインリーグ  
TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE



## 協働を支える 県内高等教育機関の取組み

西田 直樹

作新学院大学女子短期大学部 教授

栃木県には、「大学コンソーシアムとちぎ」という組織があります。県内の高等教育機関、つまり大学・短大・高専・大学校が加入している組織です。私は、地域連携事業委員という立場で参加しています。私が今「大学コンソーシアムとちぎ」で取り組んでいる事は、「とちぎ学」という授業教養科目のプログラム作りです。

「とちぎ学」という言葉は、決して珍しいものではありません。一般には郷土史を軸とした地域学として認知されています。一方、私が「大学コンソーシアムとちぎ」で取り組んでいる「とちぎ学」は、栃木県内の高等教育機関（特に大学や短大）で学ぶ若い学生が、栃木県で将来にわたって生活して行く力を身に付ける学習プログラムです。これは一見グローバル時代に逆行するような教育プログラムのように見えますが、そのような事はありません。

「地域の絆は、歴史と情報の共有から始まる。」というコンセプトから、私は教育プログラムとしての「とちぎ学」づくりを始めました。考えてみれば、私たちは学校の教科として「地域」について学ぶ機会が少なかったように思います。小学校の3年生・

4年生の社会科で「わたしたちの〇〇市（町）」「わたしたちの〇〇県」といった副読本を使っての授業を受けたくらいで、それ以降は「日本史」「世界史」に代表されるような、全国共通の社会科教育を受けて来ました。本来、愛着を持って生活して行きたい「地元」という名の地域が、住んではいるけど「知らない土地」という若者は少なくありません。今、「大学コンソーシアムとちぎ」が取り組んでいる「とちぎ学」という教養科目の授業は、栃木県内の大学や短大で学ぶ学生が、栃木県の歴史や情報について学び、栃木県の魅力を知り、栃木県の未来の発展のために働く事の意義を見出せる学習プログラムです。

それでは、「とちぎ学」の授業はどのような内容なのか、具体的に述べて行きたいと思います。授業では、栃木県の魅力を発見するために、SWOT分析をしたり、BCGのプロトフォリオの手法を使ってとちぎ県の「名物」を分類したり、マーケットマインドを持って地域を見つめ、地域の未来の発展を考える事を学びます。また、栃木県の歴史についても学びますが、その中には歴史とは呼べない「地域の記憶」とでもいうべき事項も数多く含まれています。その一つが、学生たちが通っている大学の歴史です。学生は、自分が通っている大学が、どのような経緯で生まれ、発展して来たかという事を意外に知りません。これでは自分が通う大学に愛着や誇りを持つ事は難しいでしょう。私は、地方大学こそ、多くの地元の人々の期待と協力があって初めて設立にこぎつける事ができたのだと思っています。そのような視点から自分が通う大学を見つめ直した時、地域の温かさや、決して裏切ってはならない地域の期待が具体的に見えて来るはずで

大学をはじめとする高等教育機関と地域の連携や協働というと、まず連想するのが「産学連携」や「学生のボランティア活動」です。これらの活動は、大学にとっても重要な地域貢献活動であり、今後も力を入れていかなければならない協働の分野です。その一方で、大学の社会的使命が「教育」つまり人づくりであるのなら、栃木県の大学や短大が、栃木県の歴史や情報について学び、栃木県の魅力を知り、栃木県の未来の発展のために働く事の意義を見出す事のできる学習プログラムを開発・実施する事は、大学の協働事業の一つとして、その存在を許されても良いのではないかと私は考えています。



田んぼまわりの生きもの調査に  
参加した親子

## 田園の自然再生活動

水谷 正一  
(宇都宮大学 名誉教授)



田んぼの学校（主催：NPO 法人 GW 西  
鬼怒）で田植に興じながら田舟で遊ぶ

### ■田園の価値

“農が営まれ、人々が居住する場所”を田園というなら、そこは人と作物や家畜の命がはぐくまれ、そうした命が次世代へひきつがれてきた場です。まさに私たちのまわりにある田園は、2000年以上の長きにわたり人と作物の命を引きついできたのであり、これからもその役割を果たすことが期待されます。

命の舞台となった田園では3つの価値がうみだされています。そのひとつは経済価値です。田んぼや畑で育てられた作物や家畜は、交換や販売をつうじて農家の生活や地域の経済をささえています。ふたつめは環境価値です。田んぼや畑、家屋敷や里山、小川やため池など農の営みと暮らしのなかで維持されてきた環境は、心やすらぐ田園の景観をつくりだし、多くの動植物の命をささえています。そしてみつめは文化的価値です。農耕儀礼や祭りから郷土芸能が生まれ、さまざまな文学や芸術が田園を舞台に創作されています。田園が経済価値、環境価値、文化的価値という3つの価値をささえているという事実は、是非、多くの人々に知ってもらいたいものです。

### ■田園自然再生活動のはじまり

いまふり返ると、最近の50年、わが国の農業は3つの価値のうちとくに経済価値を重んじて、効率化・低コスト化の道をひた走ってきたといえます。また、人々の暮らしも利便性をもとめて、化石エネルギーを大量に消費するスタイルへ変わりました。私たちはいま、こうした変化のなかで田園の環境価値や文化的価値がおおきく失われるという危機に直面しています。

失われた環境価値をもういちど取り戻すこと、それが田園自然再生活動の目的です。ひいてはそれが文化的価値の再興をうながし、新しい経済価値の創

造につながるはずですが、それは容易なことではありません。なぜなら環境価値の喪失は健全な生態系が劣化したことを意味しているからです。いいかえると、生態系のなかでさまざまな動植物や微生物が相互につながることにより、エネルギーや物質（炭素や窒素など）が循環するプロセスが、正常にはたらかなくなっているのです。作物や家畜がもつ本来の生命力を引きだし、農薬や化学肥料への過度な依存をやめ、有機資源の循環を重視する農業へ転換し、多様な動植物や微生物が生息できる環境に改変することが、いま求められています。持続性に疑問がある農業や暮らし方に代わる、新しいモデルが求められているといってもよいでしょう。

2003年度に始まった“田園自然再生活動コンクール”では、そうしたモデルとするにふさわしいさまざまな取り組みが紹介されています。2001年度から“環境との調和に配慮した農業農村整備事業”が始まり、水路の3面コンクリート化や生態ネットワークの分断の見直しが始まりました。2006年度に制定された“有機農業推進法”によって、行政も民間に協力して環境保全型農業の推進を担うことになりました。そして、2007年度から“農地・水・環境保全向上対策事業”がはじまり、田んぼの生きもの調査や環境保全活動に取り組む活動組織に資金が交付されるようになりました。田園自然再生活動の幕が開けた、といっても過言ではありません。

### ■生きものの生息環境を知る

園自然再生活動をすすめている活動組織では、その地域に生息・生育する特定の生きものを保全したり、種の数を増やしたりすることに取り組んでいると思います。いわば風土になじんだ生きものを大切にしている活動を行っているといってもよいでしょう。しかし、一口に生きものを保全したり増やすといって

も、そんなに簡単なことではありません。なぜかといえば、対象とする生きものの生態を知り、生存のためにはどのような環境が欠かせないのか知る必要があるからです。そのうえで、どこに好適な生息環境があるのかを調べ、それが不足する場合は新たに環境（生息場）を創造することになります。田園自然再生活動では、しばしばそうした“生きものと環境の調査”をとまなう、といっても過言ではありません。

### ■センス・オブ・ワンダー

ある特定の生きものを対象として、その生息に好ましい環境がどのように備わっているのか調べるのは、地味で手間のかかる仕事です。2年、3年かけても十分わからないかもしれません。いくら科学・技術が進歩したといっても、自然の仕組みがそう簡単にわかるものではないと考えた方がよいでしょう。むしろ、毎年くり返し調べることで、これまで知らなかった生きものと地域環境との関係を発見する、というような腰のすわった取組こそ望めます。生きものとその生息環境にかかわる調査は少しずつその重点が変わってゆくことがあっても、自然再生活動がつづく限り終わりのないものと考えて間違いのないと思います。もしあなたがこうした活動のなかで、生きものの驚くべき生態を知り、自然の不思議さに感動するという“センス・オブ・ワンダー※”を味わうことがあれば、観察や調査はますます魅力的になるはずで

※ レイチェル・カーソン著『センス・オブ・ワンダー』(The Sence of Wonder)、上遠恵子訳、新潮社、1996

### ■“農”の場に適応した生きものたち

ところで田園自然再生の現場では、多くの場合“農”が営まれています。ということは、農の営みと生きものは切っても切れない関係にあるということです。田んぼや畑、水路や小川、ため池、暮らして欠かせない屋敷林や里山林、家畜の餌をはぐくむ牧草地、そして昔はどここの農村にもあった茅場などは、人手が加わった二次的な自然として多様な生きものの生息・生育場になっています。たとえば田んぼをみると、春先に乾いた耕土を耕耘し、その後水を張ってシロカキ作業を行います。シロカキが済むと田植機で苗を移植し、それからしばらくは湛水状態を保ちます。田植えから50日程過ぎると中干

しを行う地方があり、田んぼの表土にひび割れができるまで乾燥させます。そして1週間から10日間の中干しが終わると間断灌漑に移行して、稲の稔る時期には田んぼの表面から水を完全に排水します。つまり、田んぼでは人為的にコントロールされた水環境が稲の生育をささえ、そして、田んぼの生き物たちは、田んぼという小宇宙のなかで栽培作物である稲とその成育環境を巧みに利用しながら生息・生育しています。水路やため池、屋敷林や里山林などでも事情は同じといってよいでしょう。生きものたちは、人の利用と管理によって形づくられた二次的自然に適応しながら生きているのです。

### ■農の担い手と地域住民の連帯

こうしてみると、田園自然再生は農を営む人々をぬきにして語ることはできません。言いかえれば、作物や家畜を育て、水路・畦・農道や里山林を管理する人々がいるからこそ、生きものが生息・生育できるのです。田園自然再生活動では、農を担う人々と地域の人々の連帯がつよく求められます。2007年度から始まった農地・水・環境保全向上対策では、農家と地域住民（子ども、親、祖父母）が共同して田んぼの生きもの調査を行い、希少な生きものを“発見”したり、いなくなったと思った生きものを“再発見”したことが報告されています。また、生きもの調査などの活動がきっかけとなり、農家と非農家の交流が進んだり、地域の伝統行事に参加する人が増えるといった成果が生まれています。他方で、農の担い手のなかから“環境に負荷を与えない農法によってこそ、良い作物が育つ”という立場に立った、新しい農へのチャレンジがはじまり、地域の人々から共感が寄せられています。農の現場で農の担い手と地域住民の連帯がすすめば、田園自然再生活動は命を得たものとなるはずで

### ■田園自然再生活動がめざすもの

田園自然再生活動の目的は、“農”の場に適応した生きものを保全すること、もしその数が減ったり生息場の条件が悪化したときは環境を改善すること、そしてそうした活動を通じて健全な農村生態系の再生をめざすことにあります。また、“農”の担い手と地域の人々とのつながりが生まれ、“農”も地域も元気になることをめざしています。そうした取り組みが、いま全国で注目を集めるようになりました。皆さんも機会があれば参加してみてください。きっと新しい何かを発見することでしょう。

## 【書評】 人口減少社会という希望—コミュニティ経済の生成と地球倫理



広井良典 朝日新聞出版 2013.4

評者：藤本 信義（とちぎ協働デザインリーグ理事長）

グローバル・ユニバーサル」を副題とする「地球倫理のために」となっている。

章節構成は多岐にわたる論考できめ細かであり、読者は関心のある章節から読んでよいと「はじめに」著者の指示がある。

先の3部作に先立つ著作「定常型社会」（2001）以降、「歴史の大きな流れは、『拡大・成長』と『成熟化ないしは定常化』のサイクルでとらえることができる」、という著者の一貫した認識がある。このサイクルは、人間の歴史を狩猟採集社会、農耕社会、産業化社会の3段階に大別した場合、それぞれの社会の前半は拡大・成長期であり、後半が成熟化ないしは定常化の時期にあたっている。かつ、3段階それぞれの前半から後半への移行期は、「物質的生産の量的拡大」から「内的・質的（ないし文化的）発展」への転換が行われるという。歴史の大きな流れの中で、産業化社会の後半を占めるポスト成長社会は、第3段階の定常化が進む時期に位置づけられている。それぞれの社会における前半から後半への歴史的把握もまた、「量的拡大」から「質的発展」の転換として説得力をもっている。

第Ⅱ部の各章は、本書の帰着点「地球倫理」の思想を構築する網目状のネットワークから成っている。もちろん、数多い網の目の結節点は第Ⅰ部および本書以前の著作に示されているが、「地球倫理」に至るまでに「世界実現」、「古事記」、更には神道・仏教・儒教ともつき合わなければならない。第Ⅰ部までの歴史的事実や基本的コンセプト等の確認をしつつも、「地球倫理」を新たに展開する段取りとしては、著者自らが「話題が大幅に飛躍することになるが」、「議論を急げば、」等と前置きしての論述になっており、ハードルは高めである。網の目の詳細は割愛せざるをえないが、「本来のグローバルは、ローカルとユニバーサルの対立を止揚する概念であり、『地球倫理』とは、グローバルな（地球上の）各地域のローカルな（文化的）多様性やその価値を積極的に認める思想である。」というポイントは外さないようにしたい。精読してハードルを下げるか、「議論を急がない」次の著作を楽しみに待つか、いずれにせよ、著者の時代認識に波長を合わせることの爽快感・充実感を味わえる一冊である。

本書は、我が国の人口が2005年から減り始めている事実を踏まえての著作であるが、タイトルの「人口減少社会という希望」は、奇をてらったと思われるかもしれない、と著者自身が初めに述べている。が、副題「コミュニティ経済の生成と地球倫理」が包括している内容は、ポスト成長社会を豊かで幸せを感じられる定常型社会にしていく転換期が今であることを存分に示唆している。

2001年に「定常型社会」を刊行した著者への反応の多くは、「拡大・成長のない経済や企業などありえない」だったという。しかし、人口減少が始まった今、つくれば売れる時代ではなく、モノ余り・ヒト不足が常態化しているのが現実の社会であり、定常型社会としての捉え直しが求められている理由であろう。

「コミュニティを問いなおす」（2009）と同年発行の「グローバル定常型社会」、これを統合する意味合いの「創造的福祉社会」（2011）を著者は3部作として位置づけ、その「応用編」にあたるのが本書であることを「あとがき」でふれている。前3部作は「応用編」の中でも必要に応じて確認されるので、著者の一貫性を復習しつつ読み進めることができる。しかし、読み進めるうちに次第にハードルが上げられていくことを、読者は感じ取るのではないだろうか。著者が「統合の本当の意味合い」を明らかにしたのは後半の「地球倫理」であると述べている。後半戦が本書の勝負のしどころなのかも知れない。

前半戦の第Ⅰ部は、「ローカルへの着陸」を副題とする「人口減少社会とコミュニティ経済」、後半戦の第Ⅱ部は、「科学・宗教・福祉またはローカル・